VOLUME 71
MAR 2000

HABATAKI

はばたき

UNIVERSITY OF SHIZUOKA

52-1 Yada, Shizuoka-shi Shizuoka-Ken 422-8526 Japan

inside NEWS

地方への旅行　～フィリピン ビサヤ地方 ボホール島の子供達

フィリピン大学での留学生活

～留学を希望する人へ

国際関係学部 国際言語文化学科 3年
近藤 唯

本学と学術交流協定を締結しているフィリピン大学へ、平成11年度短期交換留学生として派遣している学生、近藤 唯さんより留学生活を紹介した手紙が届いた。
　近藤さんは平成11年10月より平成12年3月までの、6ヶ月間フィリピン大学ディリマンキャンパスで学んでいる。

フィリピンには去年の春に友人と一週間ほどホームステイをしました。タガログ語を習っていたので、実力試しをしたかったからです。フィリピンはタガログ語の他にも言語があるけれど、殆どの人はタガログ語も英語も話せると聞いていたので何の不安も無く気軽に挑戦しました。しかし僕は軽く考えすぎていたらしく、自分の語学力が思った以上に無いことを実感させられました。僕は英語でも会話についていけず、会話は全て友人に任せるという不本意な結果に終わりました。

　フィリピン大学の留学の話を聞いたとき、最初は行きたいと思いませんでした。しかし海外で生活する機会はめったにないうえに、英語もタガログ語も上達させるいい機会だと考えるようになり

ました。とりあえず半年という期間を無事に過ごすという目標だけ立てて、フィリピンに渡ることにしました。

十一月から授業が始まったのですが、九月の下旬にはフィリピンにいました。言語になれるためです。予想通り最初の一ヶ月は苦労しました。寮は二人部屋だったので、ルームメイトにできるだけ話し掛けるようにしました。おかげで最初の一ヶ月で英語を話すことには抵抗を感じなくなりました。肝心のタガログ語は家庭教師を取ることにしました。大学も十月はほぼ休みだったので良いタイミングでした。

授業は三つ取りましたが、すべてタガログ語によるものでした。もちろん英語による授業もありましたが、フィリピン語を学ぶことを目的に留学したので英語によるものは取りませんでした。しかし教材はすべて英語でした。結果的には両方の勉強をすることになってしまいました。授業に使われる単語は日常会話のものとは違い、前もって調べておかないと一時間半が暇になってしまうこともありました。

クラスメイトとの会話も大変でした。英語で話し掛けられたり、タガログ語だったりで世間話にも気が抜けません。名前を覚えるのにも一苦労でした。それでも知りあいがいなかったときは、居場所がない気がして教室にいたくなかったので嬉しい苦労です。

フィリピンはタガログ語を習うまでは、あまり関心のない国でした。東南アジアにあり、暑い国であるという程度の初歩の知識しかありませんでした。タガログ語を習い始めたことで、フィリピンの歴史や民族に興味を持ちました。幸いにもその興味に当てはまる授業があったので、フィリピンに関する知識はだいぶ伸びたと思います。しかしフィリピンに来てさらに関心は増えました。日本からの観点とフィリピンからの観点で同じことを学ぶことはとても面白いことでした。

大学生活は勉強だけではありません。留学しているとはいえ、旅行もしました。地方へ行くと言葉が違うので地元の人同士の会話はほぼ分かりません。その言葉を全部覚えるのはさすがに無理でしたが簡単な会話ができると旅行自体が楽しくなるものです。壮大な自然や教会、要塞などスペイン統治時代の建物が各地に残っていたり、イエスキリストの幼い頃を信仰するサント・ニーニョ信仰があったりと興味を引くものが多くあります。フィリピンはマニラと地方の島では雰囲気がだいぶ違います。半年という短い期間で大学の授業も旅行も満足の行くまでこなすのは大変ですが、いい経験になると思います。

留学するときには、まず期待よりも不安の方が大きいと思います。しかし実際には何とかなるものでした。もちろん良いことばかりが続くとは限りません。多少は嫌な経験はします。その原因はお互いの常識の差であったり、言葉の問題であったりします。半年過ごす頃にはそれが些細なことに感じられるようになります。留学する動機がなんであれ、ちょっとでも興味を持ったら挑戦してみてください。行ってみれば何かはつかめると思います。

フィリピン大学の留学生寮にて　～各国からの留学生は留学生寮で生活している

環境科学研究所の動き

環境科学研究所長　森田 全

環境科学研究所は、環境科学に関する基礎的研究を行うと共に、県内の行政機関、研究機関および企業とも連係を保ち、環境科学研究の拠点として地域社会の環境問題の解明、健康で快適な生活環境の創造、環境についての知識の普及、専門知識を持った技術者および研究者の育成、環境問題に関する国際協力と交流を行っている。

最近1年間の研究所活動を要約すると、

1. 研究室公開（7月3日）

　積極的で優秀な学生の確保を目的として、主に大学院受験生を対象として研究室を紹介。

2. 研究所公開（8月21日・県民の日）

　一般県民を対象として研究所内を公開し、デモ実験、簡単な参加型実験、ビデオ放映などを行い、来訪者170名余の盛況で、アンケート結果も好評（写真）。

3. 静岡県民カレッジ・環境学習サポーター養成講座（8月7日～12月18日）

　地域環境保全活動のリーダー養成を目的として、昨年度から県教育委員会との共催で講演やグループ発表会を開催。

4. 第3回環境研究交流しずおか集会

　当研究所、県環境衛生科学研究所、県工業技術センターなどが中心となって、県内研究機関の交流を計る目的で発足。今年度は「内分泌撹乱化学物質（環境ホルモン）」がテーマで、学外及び研究所職員を講師とした環境ホルモン勉強会を重ね、本年3月3日に本集会を開催した。

5. 特別公開講座（10月7日～11月11日）

　「環境と健康」をテーマに榛原町で講演会を開催。仕事を持っている人にも配慮して、夜間開講したのが好評。

6. 環境科学研究所年報刊行（本年3月末）

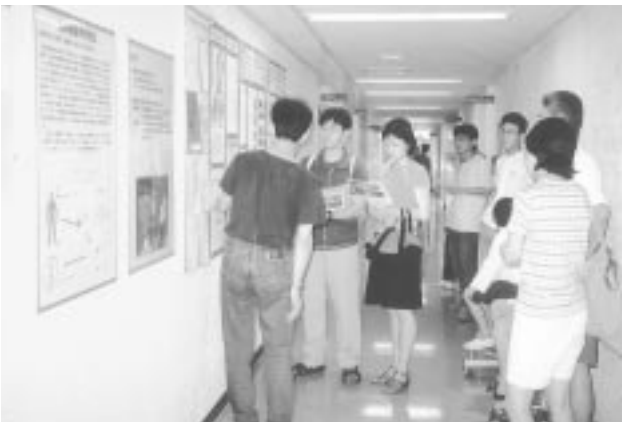
　平成11年における研究所事業活動記録および各研究室の業績目録を掲載。

上記の研究所活動の他、静岡県理科教育研究会（11年2月）、静岡県工業教育研究会（8月）、ボランティア団体（9月）、人間教育研究協議会静岡フォーラム（12月）等に対する研究所見学や講演会、小学生の環境体験学習（11年3月）を開催した。

また、来年度から各研究室より10万円、計130万円を拠出してもらい、「環境科学研究所奨励研

究助成金」を設け、助手の独創的・創造的環境科学研究を募集し、研究活動を支援して行く。

国際協力・交流関係では、協定校フィリピン大学での学術交流・研究指導・セミナー講演、ブラジルの2大学（クイアバ大・サンフランシスコ大）との部局間共同研究協定の締結、ポーランド・中国・タイ・チリ・ベトナムからの客員共同研究員や学術交流研究者の受け入れ、バイカル湖堆積物調査、東南アジアおよびチリの大気汚染調査への協力、日中健康科学シンポジウムへの参加などを行っている。外国から共同研究者を受入れる場合、発展途上国から派遣された若手研究者の中には本学の客員共同研究員規程の資格に満たない者もあり、施設利用などの面からその扱いに苦慮した。大学としても、今後このような学術交流研究者に対する配慮も必要ではないかと考えられる。



県民の日の研究所公開

附属図書館の動向

附属図書館長　志田 直正

これまでは、図書館が保存し提供する資料とは、紙に印刷された図書（定期的に発行される雑誌も含めての）のことでしたが、情報通信技術の急速な進歩により資料の形態が変わってきました。それにつれ、図書館の機能も変わりつつあるようです。

学習や研究に必要とされる情報が、記録された資料そのもの、及び図書館に整理保存されている資料を検索する手段（所蔵目録）が、「紙」に書かれたものから「電子的媒体」へ、キーボードにより入力され、ネットワーク上に存在するものに変化しつつあります。この変化を漠然と「情報化」と称しています。

本学の図書館の「情報化」への対応としては、平成9年4月、図書館のシステムパッケージを更

新し、インターネットのホームページを作成し、インターネットを利用して学外からも所蔵目録検索が可能なシステムとしました。

学術情報センターに接続しているため、全国の大学や県立クラスの公共図書館の蔵書データも検索可能となっています。

しかし、本学の全蔵書がインターネットで検索できるためには、目録データの遡及入力（コンピュータ導入以前に購入したすべての図書データを入力すること）が緊急の課題です。現在、閲覧室の和書はだいたい終わりました。これからは、書庫の中の洋書をなんとか入力できればと考えています。

蔵書の目録作成にはまだまだ時間と人手がかかるわけですが、予算化は困難との事ですので、長丁場を覚悟しています。

資料そのものの電子化については、所蔵している資料の電子化、出版社で電子化した刊行物（オンライン・ジャーナル等）の利用、各種機関が作成したさまざまなデータベースの取り込みなど、資料の形態によりいくつかの方法があります。

お隣りの県立図書館では、特別予算で所蔵資料（葵文庫）の電子化を行いました。図書館全体がそうした方向に向かっていますが、本学の蔵書そのものを電子化してインターネットで読むのは、まだまだ先のことでしょう。

最近、オンライン・ジャーナルの試行的利用を開始しました。しかし、オンライン・ジャーナルなど電子化された資料を本格的に取り込むには、紙に印刷された資料を、場合によっては捨ててもよい（継続購入しない）覚悟で、現在の予算の組み立て方を変えなければ継続利用は困難と思われますので、学内での広い範囲の合意が必要だと考えています。

データベースの取り込みについては、メドライン（ライフ・サイエンス）とシナール（看護学）についての学内での利用を可能にしました。

さらに、ケミカル・アブストラクツ（化学）をはじめ各種のデータベースの取り込みを考えるには、電子媒体の急激な発展と普及の方向を見極める能力を求められ、どの媒体の、どの方式が、今後、普及定着するか判断して対処していく考えでいます。

この図書館の「情報化」を「電子図書館化」とも称し、各大学に対し、文部省は熱心に勧めていますが、各大学とも試行錯誤を繰り返しているようです。

しかし、ここで忘れてはいけないのは、在来型の図書館の機能、紙に印刷された図書を蓄積し、学生及び教員の学習及び研究の基本である読書を支えることが、やはり大学図書館の最も重要な役割であることです。

もっとも基本である、学生のための基本的な図書、大学が大学であるための教養書の購入が現在のところ難しくなっています。

「情報化」のことばかり注目されていますが、基本的な学力、教養（読書力）があってこそ電子

媒体の情報も活用できるということが、どうもおろそかにされているようですので、このことについても忘れないで充実していく所存です。

それから、附属図書館には、開館時間のさらなる延長や、土日の開館等、緊縮予算処置のもとで、解決していかなければならない課題が山積みしていますが、学習や研究のために活用しやすい図書館をめざして取り組むつもりです。

短期大学部浜松校の動き

短期大学部部長　佐々木 崇暉

浜松校が平成13年3月末日をもって廃学科することは、既に決定されていました（平成9年11月の教授会において文化教養学科と食物栄養学科の学生募集停止を決議）。また、浜松校に在籍する全教員（33名）の移行先も既に決まっていましたが、移行の内容を具体的に詰めていくことが、平成11年度の最大の課題でありました。交渉の過程で、以前に情報が充分に伝わっていなかったために、振り出しに戻るといった紆余曲折があったものの、短期大学部静岡校、県大食品栄養科学部、県大学室の御協力と御配慮によって、33名の教員の活躍の場を確保することができました。改めて、関係各位に感謝申し上げたいと思います。

浜松校の歴史を振り返ると、前身の静岡女子短期大学が浜松市に移されてから34年、短期大学部に改組されてから13年、この長い歴史を閉じようとしています。この間多くの優秀な人材を地域社会に送り出し、高い評価を受けてきました。また、本学は、比較的恵まれた環境の中で「大学らしい大学」という伝統を築きあげてきました。

その一つは、学内運営が非常に民主的に行われ

短大部同窓会 ～11年度総会～

てきたという点であります。学内経営の細部にわたって各種委員会が検討し、委員会の提案の下に、全員参加の教授会において徹底的に議論し、決定するという方式であります。この方式は、一見非効率的なように見えますが、教員の「自分たちが運営している」という意識を醸成し、組織へのロイアリティを強めるのに役立ってきました。このような教員の意識が、本学の改組、転換といった荒波を乗り越えさせる原動力になってきたものと確信しています。

また、本学において教職員と学生の間の距離がとても身近である点も、良き伝統の一つであります。教員と学生は講義室やゼミ室だけでの関係ではなく、課外活動やさまざまな行事を通じて密接な交流を持ち、信頼感を基礎にした人間関係を築き上げてきました。そのため年に一度、本学で開催される同窓会総会には200名以上の卒業生が集い、思いで話に花を咲かせています。

第三に、本学においては、いい意味での「教養主義」が根付いてきました。学則の第一条にあるように「教養的視点」が重視され、最先端の知識や学問を学ぶだけでなく、それらの持つ時代的、社会的意味を問いつつ学ぶという視点であります。特に現代社会においては知識や学問の社会的意味が問われる時代です。たとえ知識そのものが科学的で精密であっても、その結論を実社会にあてはめてみた場合に、人々を不幸にしたり、環境を破壊してしまうことは度々起こります。私達は知識や学問を学ぶにあったって、その点を充分に注意しなければなりません。「教養ある人」とは、博識ある人と同一ではありません。自分の意見や考えを持つ人こそ「教養ある人」なのです。浜松校で培ってきた「教養人」は、これからの時代ますます重要視されていくと思われます。

このような伝統を築き上げてきた浜松校の歴史を閉じることは、私たち教職員一同にとって誠に残念なことです。しかし、この良き伝統は、必ずや静岡校や静岡文化芸術大学に引き継がれていくものと確信していますし、私達一人一人の心の中に生き続けていくと思います。

短期大学部静岡校の動き ～この春に4年目を迎える～

短期大学部副部長　手塚 直樹

平成9年4月、静岡校はここ小鹿の地に開校した。かって県立薬科大学のあったキャンパスには当時の伝統を思わせる大きなけや木が3本あり、春の新緑、夏の緑、秋の池いっぱいの落葉と市内にはめずらしい自然豊かな環境である。

平成12年4月には、開校4年目を迎える。浜松校から移行した看護学科、新たに設置された歯科衛生学科、社会福祉学科、開校から3年を終えて落着きのなかに学生の明るい積極的な行動が見られる。静岡校の最近の動きを紹介したいと思う。

専攻学科と学生の状況

静岡校は、看護婦、看護士をめざす第一看護学科、第二看護学科、歯科衛生士をめざす歯科衛生学科、社会福祉士・保育士をめざす社会福祉学

科・社会福祉専攻、介護福祉士をめざす社会福祉学科・介護福祉専攻のおおよそ540人の学生が学んでいる。

医療・保健・福祉系の公立短期大学は数少ないので、全国各地からの学生が年々多くなり、全国レベルの大学になってきている。

将来、医療・保健・福祉の専門分野で専門従事者として働く学生は、実際の現場で多くの実習を通して学ぶことが必要で、看護学科の場合は3年間で23週、介護護福祉専攻の場合は2年間で10週の実習が必要で、大学内の学びと実習におわれて学生たちは忙しい毎日であるが、その中にも、クラブ活動や、教員と学生、学生同士の交流など、積極的な生活をしている。

昨年の卒業生のうち、柔道部の活動に参加した学生は幾人も「くろおび」で卒業したし、2000年最初の『NHKのど自慢静岡大会』で、介護専攻の2年生8人が、大学祭で披露した「8人娘」の歌と踊りで,参加20組中唯一の特別賞となって、応援団ともども大いに盛り上がったなど、忙しい学びの中にも若さと行動で、豊かな学生生活を送っていると思う。

また、就職については、高齢社会や介護保険制度等の進展のなかで、医療・保健・福祉の専門分野の求人は多く、初めて卒業生を送りだした昨年は、就職率ほぼ100％で、今年も同様の期待が持てると思う。

いくつかの課題

実践的な専門従事者の養成にとって重要な現場実習は、県下の養成校の増加の中で、実習の場の確保が競合するが、県立大学ということと実習先の理解と協力を得て、現状では大きな問題にはなつていないが、将来的には厳しい状況になってくると思われる。

また、資格取得のために必要な総単位数が、社会福祉学科では2年間で80から90単位、複数の資格取得の場合は100単位を超える。実習重視の国の方針のなかで、今後さらに厳しくなり、ゆとりのある学生生活は、4年制への移行の検討に待たなければならないと思っている。

当面のこととしては、浜松校の廃止に伴って13年度から短期大学部が静岡校キャンパスひとつになるため、12年度はその準備であわただしくなることと思う。

地域貢献へ向けて

静岡校は門も塀もない。地域の人とのごく自然な交流を図っていきたいとの主旨からである。付近の幼稚園、保育園の子どもたちが芝生で遊び、また昼どきの食堂では近所のお年寄りや子づれのお母さんが学生と一緒に食事をしている光景は毎日のように見られる。医療・保健・福祉の専門大学として、地域への貢献と交流を今後も積極的に図っていきたいと思う。

THE FORTH CHINA-JAPAN INTERNATIONAL SYMPOSIUM ON HEALTH SCIENCES

第4回日中健康科学シンポジウムへの参加

薬学部長　鈴木康夫

平成11年10月24日～29日、第4回日中健康科学シンポジウムが中国、浙江省医学科学院（杭州市）において開かれました。これへの参加・学術交流、および、これと平行して行われた、浙江大学への表敬訪問および交流について報告します。

1）日中健康科学シンポジウム開催の経緯

1991年（平成3年）11月、静岡県立大学薬学部は浙江省医学科学院薬物研究所との文化科学技術交流に関する協定書を交わした。これに基づき1993年（平成5年）12月、本学にて第1回日中医薬学シンポジウムが開かれ、1995年（平成7年）11月杭州にて第2回日中医薬学シンポジウムを開催した。1997年（平成9年）5月には、本大学と同研究所の文化科学技術交流に関する協定書に締結し、さらに幅広い交流を行うこととなった。1997年（平成9年）12月には、本学にて第3回日中健康科学シンポジウムを「全学的行事」として開催した。今回、中国側で行われた第4回日中健康科学シンポジウムは、この大学間協定に基づくものである。

一方、本学は1988年杭州大学（現 浙江大学）との大学間協定を結び、学術文化交流を続けてきた。今回、平成11年10月24日～29日に渡り、第4回日中健康科学シンポジウムへ参加（10月26～27日）および浙江大学への訪問を行い、学術・交流交流を行った。

2）シンポジウムへの日本側参加者

廣部雅昭学長（団長）、鈴木康夫教授（薬学部長）、斉藤恵實教授（大学院薬学研究科長）、祐田泰延教授（薬学部製薬学科長）、藤井 敏教授（大学院薬学研究科・製薬学専攻長）、野口博司教授（薬学部）、野呂忠敬教授（大学院生活健康科学研究科長）、森田 全教授（環境科学研究所長）、木苗直秀教授（大学院生活健康科学研究科・食品栄養科学専攻長）、野澤龍嗣教授（食品栄養科学部）、吉岡 寿助教授（環境科学研究所）、以上11名の他、シンポジウム通訳として李 軍 薬学博士（現 株式会社矢内原研究所 研究員）および郭 潮潭氏（現 静岡県立大学薬学部生化学教室客員共同研究員）が同行。合計13名が参加した。

3）シンポジウムへの中国側参加者

毛江森 浙江省医学科学院長、張幸 同副院長、張雲東 同副院長、他、浙江省医学科学院薬物研究所、同衛生学研究所、同保健食品研究所、同生物工程研究所から各所長、研究員等が参加した。プログラムに登録された参加者は総数20名、その他、数10名が参加した。

4）発表演題およびシンポジウム

日本から10題、中国側から20題（内10題は紙上発表）が発表され、活発な討論が行われた（別紙プログラム参照）。

シンポジウム終了時に、2年後（平成13年度）に第5回日中健康科学シンポジウムを静岡で行うこと、より具体的な共同研究を推進することを申し合わせた。

5）シンポジウム終了

シンポジウム終了後は、浙江省医学科学院内の各研究所見学、浙江大学への表敬訪問、学術および文化交流を行った。杭州大学は、1998年に浙江大学、浙江医科大学、浙江農業大学の各大学と統合され中国一の規模を誇る新しい浙江大学となった。今回が、大学統合後、本学からの最初の訪問となった。杭州市滞在中は、浙江省医学科学院長、副院長から、終始、厚い歓迎を受けた。また、上海では、今村理一郎静岡県上海事務所長から格別なお世話をいただいた。感謝申し上げる。10月29日全員が無事帰国した。

Program of the Fourth China-Japan International Symposium on Health Sciences (26-27 October, 1999)

Sponsored by
Zhejiang Academy of Medical Sciences (ZAMS)
University of Shizuoka

10/26 (Tue)

Opening Session Chairpersons: Zhang Xing, Yasuo Suzuki

8:30-9:30 Opening Remark from China: Mao Jiangsen
Opening Remark from Japan: Masaaki Hirobe
Welcome Speech: Government Official

1st Session Chairpersons: Masaaki Hirobe, Chen Guoshen

9:30-9:55 Zhang Ru-song (Institute of Materia Medica, ZAMS)
One New Antineoplastic C-21steriodal Glycoside from the Root of Rynanchum Auriculatum

9:55-10:20 Yasuo Suzuki (School of Pharmaceutical Sciences, U-Shizuoka)
Possible Mechanism of the Emerging of a New Subtype of Influenza A Viruses in Southern China

10:20-10:45 Yuan Yu-ying (Institute of Materia Medica, ZAMS)
Polyphosphoinositide (PPI) Breadown and Subsequent the Acrosome Reaction in the Ca2+/GABA-induced of Guinea Pig Spermatozoa

10:55-11:20 Satoshi Fujii (School of Pharmaceutical Sciences, U-Shizuoka)
To Evaluate the Contribution of the Amino Acid Substitutions to the Conformational Stability

11:20-11:45 Liu Xue-li (Institute of Materia Medica, ZAMS)
Extraction and Isolation of Active Component for Inhibiting PC3cells Proliferation in Vitro from Fructu Lycii

11:45-12:10 Hiroshi Noguchi (School of Pharmaceutical Sciences, U-Shizuoka)
Green Tea Polyphenols: Novel Enzyme Inhibitors of Vertebrate Squalene Epoxidase

2nd Session Chairpersons: Zhang Xing, Yasuo Suzuki

14:00-14:25 Zheng Gao-li (Institute of Materia Medica, ZAMS)
The Inhibition of Total Isoflavones of Pueraria on Bone Loss Induced by Estrogen-deficienty in Rats

14:25-14:50 Megumi Saito (School of Pharmaceutical Sciences, U-Shizuoka)
C-series Gangliosides may Serve as Specific Autoantigens in Insulin-dependent Diabetes Mellitus

14:50-15:15 Ye Jin-cui (Institute of Materia Medica, ZAMS)
Hup-A Transdermal Delivery System

15:25-15:50 Yasunobu Suketa (School of Pharmaceutical Sciences, U-Shizuoka)
Regulatory Disturbance in Renal Na/K-ATPase by Aging

15:50-16:15 Zhang Xing (Institute of Hygiene, ZAMS)
The Prevalence of Asbestosis and Pleural Plaque and the Mortality of Malignant Tumors in Asbestos Handtextile Female Workers

16:15-16:40 Tamotsu Morita (School of Nutritional and Environmental Sciences, U-Shizuoka)
Quantitative Detection of Viral Genes in Sera by Competitive Polymerase Chain Reaction as a Clinical Marker

16:40-17:05 Wu Nan-xiang (Institute of Hygiene, ZAMS)
Studies of the Distribution and Concentration of Toxic Metal in Bread-bean Grown in soil with Different Content Sludge

10/27 (Wed)

3rd Session Chairpersons: Chen Yong, Naohide Kinae

8:30-8:55 Hisashi Yoshioka (School of Nutritional and Enviromnental Sciences, U-Shizuoka)
Evaluation of Radical Scavenging Activity of Tea Catechins

8:55-9:20 Ren Yu-cui (Institute of Healthy Food, ZAMS)
Research on the Effect of Houttuynia Cordata Thunb Nutrient Liquid for Increase of White Blood Cells

9:20-9:45 Naohide Kinae (School of Food and Nutritional Sciences, U-Shizuoka)
Comparison of Functional Activities of Japanese Tea and Chinese Tea

9:45-10:10 Chen Yong (Institute of Biological Engineering, ZAMS)
Complete Nucleotide Sequence of HAV Hangzhou Isolate

10:20-10:45 Ryushi Nozawa (School of Food and Nutritional Sciences, U-Shizuoka)
Involvement of Myeloic S100/action System in Cell Movement and Phagocytosis

10:45-11:10 Wen Li-yong (Institute of Parasitic Diseases, ZAMS)
Anthelmintic Efficacy of Ivermectin on Ancylostoma. caninum, Nippostrongylus. brazilienses and Syphacia. mesocriceti

11:10-11:35 Tadatada Noro (School of Nutritional and Environmental Sciences, U-Shizuoka)
Studies on the Constituents of Propolis

Closing Session Chairpersons: Zhang Xing, Yasuo Suzuki

11:35- Closing Remarks

THE FORTH CHINA-JAPAN INTERNATIONAL SYMPOSIUM ON HEALTH SCIENCES

浙江大学 王李文講師来学

県立大学と学術交流協定を結んでいる浙江大学より王李文講師が、2月16日来日した。王講師は国際交流事業による浙江大学からの派遣教員として、3月18日まで滞在した。

王講師は浙江大学国際教育学院の所属で、浙江大学で、留学生教育や国際交流を担当している。

王講師は、本学で「日中文化の比較研究」をテーマに滞在し研究を行った。本学の受入れ教員は余項科国際関係学部講師が勤めた。なお研究テーマが、日本の言語に着目するものであるため、言語学が専門である国際関係学部の水野かほる講師、田中ゆかり講師が研究に協力した。

●学長への表敬訪問

中国と日本の文化の違い

言葉と生活習慣を巡って

王 李文

中国と日本は一衣帯水の隣国であり、古くから各方面にわたって、交流が頻繁に行われてきた。従って、両国の共通点が非常に多い。恐らく欧米人にとっては中国と日本の違いは想像さえできないことであろう。遠く離れた東にある同じような国で同じような人間が住んでいるのではないかと思っているのであろう。同じように見える国で一体どこが違っているのであろうか。

まず、言葉から見てみよう。日本には女性独特の言葉がある。日本語は男性言葉と女性言葉をちゃんと使い分けている。中国語は男女の言葉の使い分けをしない。例えば、こんな会話がある。A「やあ、元気かい。」　B「ええ、元気よ。あなたも黒くなったわね。泳ぎに行ったの？」　A「いや、山へ行ったんだ。」　B「何日ほど行ったの？」A「一週間だ。山小屋に泊まったりテントを張ったりして楽しかったよ。君は何処へ行った？」B「海南島で遊んだわ。泳いだりゲームをしたりして、楽しかったわ。」この会話を聞くと、話し手がどちらが男性かどちらが女性かすぐ見当が付く。もしこれを中国語に訳すとぜんぜん区別が付かなくなる。

日本語の男女差はまず人称代名詞からして違うのである。例えば、普通、男性用はぼく（第一人称）、きみ（第二人称）であり、女性用はあたし（第一人称）あなた（第二人称）である。「ぼく」と「きみ」は男性専用語である。このほかに、男性専用語として「おれ」（第一人称）、「おまえ」（第二人称）がよく使われる。女性専用語に「あたい」「あたし」「あたくし」などがある。中国語なら男女ともに第一人称として「我」、第二人称として「你」、特に尊敬すべき人に対しては「您」を使

う。それだけで、男女の区別はない。

次に生活習慣においても中国と日本は違う。まず、食文化の面であるが、お酒を飲む場合、中国人は相手を歓待するために何度も乾杯をする。そして、そのために注いだお酒を一気に飲む。小さな杯にしてもビール一杯にしても同じである。これは中国の習慣だ。ビジネス界では特にそうである。日本でもお酒を注いだり乾杯したりするが、そういうことをするのを余り見たことがない。食事をする場合も中国と日本は違う。中国人はまず食べ切れないほど料理をたくさん注文する。足りないと失礼になるから。食べ残っても失礼ではないどころかかえってうれしいと感じる。これに対して日本人は適当な量を出して食べ残るのは失礼だと思って、最後まで綺麗に食べるようである。そして、日本人は食事をするときに「いただきます」と言い、食べ終わった時に「ごちそうさまでした。」と言う。中国人はこのようにしない。皆が集まれば自然に食べ始まるのである。

更に、挨拶に付いても中国と日本は違いがある。日本人はよくお辞儀をするのに対して中国人は握手するのが普通である。昔、中国人もよくお辞儀をしたが、日本人のお辞儀とまた違う。日本人には改まったお辞儀の礼儀がある。特に年配の方々通し、あるいは正式な場においてはそうなのである。時に90度も曲げてお辞儀をすることがある。何処へ行ってもお辞儀をする日本人を目にするのである。これに対して、中国人は挨拶するときにお辞儀をしないで、握手をする。

私は日本に来て、「すみません」「ごめんなさい」というような言葉をよく耳にする。例えば、汽車に乗る場合、席が空いていてもまず隣の人に「宜しいですか」と聞く。このようにして、人間関係はスムーズになり、摩擦が少なくなるのではないかと思う。中国ではここまで丁寧なことはあまりしない。中国でもこのようなことが普及すればいいと思う。

以上、言葉、生活習慣において、中日の違いをごく一部取り上げたが、これ以外も多くの違いがあると思う。中国と日本はこのようによく違っているが、この違いを自覚してこそ表面的付き合いを越えた本当の交流が生まれてくると思う。

●浙江大学 西渓校区

環境研究交流しずおか集会平成11年度大会

環境ホルモン勉強会

3月3日に本学小講堂においてシリーズ「環境ホルモン（内分泌撹乱化学物質）」勉強会として講演会が、開催された。今回の講演会は、環境研究交流しずおか集会の平成11年度大会も兼ねて開催された。

本学環境科学研究所では、静岡県の環境に関する科学的、研究的な情報交換を目的として、平成9年度から「環境研究交流しずおか集会」を開催している。この集会では、昨年より「分科会」のテーマとして、環境ホルモンをとりあげ、これまで4回の勉強会を行ってきた。この分科会は、多くの人に環境ホルモン（内分泌撹乱化学物質）についてより深く、より正確に理解してもらい、環境ホルモンについての基礎知識を養うことにあり、さらに我々の子孫を守るため我々は今何をすべきかを真剣に考え、そのために最も有効な対策を立案することを目的としている。

今回の講演会は一般講演と特別講演の2部で構成され、一般講演では、本学の環境科学研究所、食品栄養科学部、薬学部、水産庁遠洋水産研究所による環境ホルモン研究最前線の研究報告、静岡県生活環境室による「静岡県のダイオキシン等有害化学物質についての取組みについて」、静岡県環境衛生研究所による「県内の内分泌撹乱化学物質の測定状況について」が報告された。

特別講演では、環境ホルモンの名付け親として知られる横浜市立大学井口泰泉教授の「環境ホルモンの何が問題か」、一般の関心が強い「食品用器具・容器包装中の内分泌化学物質」について、国立医薬品食品衛生研究所河村葉子室長の講演、ダイオキシンの毒性発言に重要な働きをすると考えられているトランスサイレチンについての山梨医科大学前田秀一郎教授の講演が行われた。

当日は、県の工業技術センターや環境科学研究所の研究者、県や市の環境部門の職員、静岡大学、東海大学等の他大学の研究者、高等学校の教員、環境問題に関係する企業、環境問題に興味のある一般の方々等、約200名が参加した。各講演者の講演後は多くの質問が出され活発な質疑応答が行われた。

研究助成の採択

■平成12年度ダノン学術研究助成金受賞　平成11年11月13日決定

・下位 香代子　食品栄養科学部　食品衛生学研究室　学内講師
「血管内皮接着分子の発現を制御する食品因子の検索と
その制御機構に関する　研究」

■平成12年度　財団法人　平和中島財団　国際学術研究助成

・増澤 俊幸　薬学部　微生物学研究室
「フィリピンのレプトスピラ症の制圧
―診断・治療法確立と予防ワクチン開発の研究―」

人　事

■部局長の就任

平成12年1月1日付け

・関森 勝夫　国際関係学部長
＊平成11年11月16日に行われた国際関係学部長選挙により選出。
任期は平成13年12月31日までの2年間

受　賞

■第30回全国学生俳句大会入賞報告

・日本学生俳句協会主催、財団法人日航財団の協賛により平成11学年度 第30回全国学生俳句大会が開催され、小学生から大学生まで、全国から169,560句の応募があった。
本学の学生が次のとおり入賞した。

特別賞　日航財団賞及び特選

・白石 大樹　　大学院国際関係学研究科 比較文化専攻 1年

入選

・小楠 景子　　国際関係学部 国際言語文化学科 4年
・道　日娜　　大学院国際関係学研究科 比較文化専攻 1年

佳作

・山口 忠臣　　国際関係学部 国際言語文化学科 4年

新刊案内

●本学関係者著書紹介

小針 進 著（国際関係学部 助教授）

「韓国と韓国人」

―― 平凡社新書　1999年11月発刊

アンマリー・ミューレンダイク 著
立脇和夫・小谷野俊夫 訳

「アメリカの金融政策と金融市場」

―― 東洋経済新報社　定価 本体3,200円（プラス税）

［一口紹介］

本書はアメリカの金融政策を実施しているニューヨーク連邦準備銀行のミューレンダイク女史がアメリカの金融政策と金融市場の実状を解説したものである。金融政策については、政策がどのように形成・決定されるか、その実施はどのようになされるか、について当事者であるだけに、具体的に説明している。金融市場の説明も当を得たものである。アメリカの金融事情を知るのに欠かせない一冊。翻訳は国際関係学部教授の小谷野俊夫と早稲田大学商学部教授の立脇和夫（元本学国際関係学部教授）の共訳。

Books Information

モスクワ国立国際関係大学

コーニナ助教授来学

県立大学と学術交流協定を結んでいるモスクワ国立国際関係大学よりナターリャ・コーニナ助教授が、2月25日来日した。

コーニナ助教授は、モスクワ国立国際関係大学国際経済学部経営・マーケティング学科に所属している。本学における研究テーマは日本における法人のマネージメントで3月25日までの1ヶ月間滞在し研究を行った。

受入教員は島田孝夫国際関係学部助教授が勤める。なお研究テーマの専門分野に関係する国際関係学部、経営情報学部の教員が研究に協力した。

コーニナ助教授は、図書館での資料収集、文献の調査、日本企業への訪問等により活発な研究活動を進めた。

学内で結婚式

3月4日、本学のモニュメント前にて学生の結婚式が行われた。
大学院薬学研究科博士後期課程薬学専攻3年 塩川健一さんと看護学部看護学科3年 永井真由美さんが
廣部学長の立会いにより、本学のシンボルであるモニュメント前で人前結婚式を行った。
学内での結婚式は本学始まって以来の出来事である。
当日はモニュメント前に赤いじゅうたんがしかれ、飾り付けも行われ、
学生の親族、友人、学内の教員、学生などの関係者が出席し、
二人が学び、思い出の多いキャンパスで式が挙げられた。
式では学長が結婚宣誓書に立会いのサインを行い、バルーンが飛ばされ結婚を祝った。

谷田風土記 63

県大の万葉植物　～ツツジ～

県立大学は、緑豊かな大学として、有名である。よく見ると多くの万葉植物があり、その数は、これまで調査しただけでも、60種以上になっている。

一番目立つのが『ツツジ』である。しかもサツキツツジが中心である。サツキツツジは、万葉時代は『岩ツツジ』と呼ばれていた。かなりの園芸種があるため、サツキ類として、独立して数えられるようになっている。

万葉集には、合計10種、ツツジを詠んだ歌がある。

『風早の三保の浦みの白つつじ
　　みれどもさぶしなき人思えば』
（河辺宮人・巻三・434）

が有名で、これは清水説・和歌山説とふたつあるが、清水の羽衣の松の手前にこの歌碑がある。

ツツジは、万葉仮名では、茵・管仕・管自・管土・都追慈となっている。

桜がはでやかな気分を象徴するのに対して、ツツジは若く美しい男女をあらわす花とされており、県立大にこの花があるのは、理にかなっていると言えよう。

特に、グランドの上のツツジの群生は見事なもので、恐らく全国有数の規模といえるだろう。

国際関係学部教授　高木桂蔵

はばたき寄金からのお知らせ

●はばたき寄金では、各学部の成績優秀者に、卒業式において「はばたき賞」を授与しました。

学　部	学　科	氏　名
薬学部	薬学科	加藤 麻紀
	製薬学科	岩崎 絵里
食品栄養科学部	食品学科	藤田 理英子
	栄養学科	杉山 景子
国際関係学部	国際関係学科	名倉 英子
	国際言語文化学科	後藤 美佳
経営情報学部	経営情報学科	池ヶ谷 安里

はばたき寄金

●12月末現在寄金高●

4,184,959円

（平成12年度収入 764,897円）

学内ニュース「はばたき」への掲載について

教員の新刊案内、受賞、研究助成への採択、学会開催などの教職員関係のニュースや投稿を歓迎します。
掲載希望がありましたら、事務局企画・情報スタッフ（管理棟2階）あてに原稿をお寄せください。

企画・編集：静岡県立大学広報誌編集会議 ／ Tel: 054-264-5103 ／ E-mail: kijo4@gm.u-shizuoka-ken.ac.jp